

---

# 碧い炎

蒼際

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

碧い炎

### 【Nコード】

N5648A

### 【作者名】

蒼際

### 【あらすじ】

碧い瞳に映るのは、死の瞬間の映像とすこし先の未来の映像……

## 過去の回廊

薄暗く、ぼやけている天井は、私の家の風景。

視線が動かない、全身が鉛のように重たくて、ピクリとも動かない。

すこしの間、天井を見上げていると、薄暗い天井に赤い色が加わる。

絵の具？と思ったが、違う……これは、私の血液だ。

微かに横に見える鏡に、今の状態を明確にする姿が映っている。

後頭部から血を流して、畳に横たわっている私と、知らない誰か。その知らない誰かは、片手にパンの生地でも伸ばすつもりなのか、長く太い木の棒を握っている。

頭が霞んでいく……思考能力の低下しているのだらうと、私は勝手に理解する。

多分、私はこの知らない誰かに殺されたんだらう。でも、なぜ殺されたんだらう？

私には、殺される覚えがなかった。なら、簡単だ。これは『通り魔』だ。

でも、不思議と痛覚を感じない。頭を殴られたのだから、普通なら頭痛がするモノではないのかと、内心で文句を言う。

だけど、コレは多分、私が昔から望んでいた事……何も感じない世界、死の世界なのだ。

風景が消えて、無明の世界が眼前に広がる。

何もない世界には、『私』という存在すらない。

ここで、私はこの何もない世界が嫌になった。『死』は全てから開放されるモノではなく、捨てられる事なのだ。

伽藍の世界は、要らない

そう思うと、目が覚めた。生温い液体が、背中を濡らしている。

そこは、誰も居ない夕暮れの私の部屋で、生温い液体は、私の体から流れ出た血液だった。

風に遊ばれているカーテンを片手で掴んで、視線を鏡に逸らす。顔半分を血で濡らした私をただ映している鏡の傍の床には、一つだけ短剣を象ったピアスが、ポツンと置かれている。

そのピアスに、私は見覚えがなかった。

部屋の出入り口である引き戸が開かれた。買い物から帰ってきた模様の母親が部屋の出入り口の前に佇んでいる。

母親は口をポカンと開いて、持っていた買い物袋を床に落として、呆気にとられている。

それもそうだ。顔半分以上を赤い血で濡らしている娘の姿を母親としては、正しい反応だ。

私は顔だけ母親に向けると小さく、

「私、誰かに、棒で頭を殴られた、でも、痛く、ない」

母親にはその呟きは聞こえない……

12歳の夏の初旬の出来事だった……

## 1話 碧眼の少女

どこかの病院内の室内で、私は仰向けで寝ている。

視線を横にすこし逸らせば、輸血パックが鉄の細長い棒に固定されて、パックからは細長い管が、私の片腕の血管に伸びている。

紺のブレザーは横に掛けられていて、服装は白いシャツの襟をネクタイで締めていて、下はブレザーと同じ色のスカート。

私の名前は伏見咲<sup>ふしみさき</sup>といって、現在は17歳。

乱雑に切られた黒い艶のある髪は背中半分まで伸びていて、綺麗な碧い瞳、顔は幼い感じは一切なく、大人びた綺麗な顔立ちである。飾り気があまりない式だが、片耳に銀色の短剣を象ったピアスを刺し通している。

記憶がどこかで途切れていているが、私がここに居る理由と経緯は大体見当がつく。

大方、また学校で吐血して、貧血になりそのまま病院に搬送されて、現在に至っているのだろう。5年前から、体はこんな調子だ。

待つ事20分……輸血パックの血液は空になり、私は勝手に輸血用の注射針を無造作に血管から抜いて、その場に置いて、ブレザーを制服の上から羽織る。

すこし、過去の話になるが、私は5年前のあの日、殺された。

そして、おかしな眼と、このピアスを手に入れて、その性なのか、何かあるとすぐに口から血を吐血する有様だ。

おかしな眼というのは、信じられない話だけど、人と自分の未来と死ぬ時の映像が見えてしまうのだ。もちろん、私自身に見えるのは、すこし先の未来だけで、私はこのおかしな眼を『未来死の魔眼』と呼んでいる。

仕切られていた白いカーテンを片手で捲くつたら、医者らしき男性と正面衝突して、咲はその場の床に尻餅をつく。

「いきなりだったから、すまない。その様子だと、もう大丈夫そう

だな」

医者らしき男性はそう言いながら、咲に片手を差し伸べるが、

咲は医者の手を無視するように、自分で立ち上がり、「知らない人とは関わるなつて、小学校で教えられた」

線の細い声で、短く言葉を吐き捨てる。

これには、医者らしき男性も苦笑しながら、

「それもそうだ。金はアンタの連れが支払ったから、毎度どうも」  
軽い口振りでそう言いながら、奥の部屋に歩いていく。

（連れ？）

咲は医者らしき男性の言葉に疑問を感じながら、出口の方に歩いていく。

（誰だろう？）

その疑問はすぐに解けた。出口の前に学生服姿の黒い短髪の少年が立っている。

「やっと起きた。本当に不自然な体だね」

肩まで挙げた片手を軽く振りながら、少年は笑いながら言う。

咲はその言葉に自分でも納得したのか、ため息に似た息をすこし吐くと、

「……それで、輸血代はいくらだった？勇」

早速、お金の清算の話を持ち出す。

「病人からお金を受け取る趣味は僕にはないよ。それより、午後の授業はどうする？」

「今日はそのまま家に帰る事にする。勇は？」

病院の出口を並んで通過しながら、咲は勇と呼ぶ少年に質問を返す。

勇はすこし考えながら、

「午後の授業は数学とHRだから……今日は僕もサボろうかな」  
そう答えると、何だか包容力のある笑みを薄っすらと表情に浮かべる。

一緒にするな、と咲は言いたかったが、我慢する。後ろに建っている病院はどんどん遠ざかり、最後には見えなくなる。

勇の学生服も上着は紺色のブレザーなので、微妙に咲とペアルックである。

季節は春の4月で、すこし前に高校2年に上がった。

歩道と車道はすこし錆びたガードレールで仕切られていて、間違っ  
て車道を歩く事はない。

歩く毎に移動する見慣れた風景を眺めながら、

「あのさ、前々から言おうと思っていたんだけど、一度だけ大きな病院で精密検査受けた方がいいんじゃないの？」

唐突に勇は式に訊ねる。咲は考えもせずに即答する。

「精密検査するだけ無駄だと思う。これは、後遺症みたいなモノだから」

実際は精密検査を受けるのが面倒なだけだが、そこは言わないでおこう。

勇は、ふん、と喉を鳴らしながら、周りの風景に視線を逸らし  
て、咲も勇とは反対の風景に視線を逸らして、真っ直ぐ歩いていく。  
蒼い空には、真っ白な雲が幾つか浮かんでいる。しばらく歩いて  
いくと、左右に分岐する歩道と車道が合併する場所に到着する。

咲は左、勇は右で、ここで別れる。お別れの挨拶はないが、軽く  
片手を振る程度の事はする。

数歩、咲は歩いていくと、突然勇の未来が一瞬だけ見えた。『車  
に轢かれる勇』の映像。

咲は踵を返すと全速力ですこし離れた勇の後ろ姿を追いかけて、  
勇の片腕を強く握ると勇の顔を自分の胸に衝突させる。

歩いていた先の小型車一台分の小さな路地から、小型車がすこし  
速い速度で通り過ぎていく。

咲はひとまず安心した。そして、勇を胸に押し付けていたのを不  
意に思い出す。

胸に押し付けられた勇の顔は赤くなっていて、自分で押し付けた

咲も顔を真っ赤にして、勇を軽く突き飛ばす。

よろけながら数歩後退する勇を無視するように、全速力で咲は逃げるようにその場から走り去る。

（何だか、大胆だったな……それにしても咲の胸……柔らかかったな……）

変な妄想をしながら、ゆっくりと歩き出す勇であった。



## 2話 開幕式

咲は顔を真っ赤にさせながら全速力で、家の近くの公園に逃げ込むように公園内に走っていき、緑色のベンチに腰掛ける。

走りすぎて酸欠を起こしているのか、息切れに動悸が激しく、体が熱く、締めているネクタイを片手ですこし緩めて、片手で宙を仰ぐ。

（何で、あんな事をしたんだろう……）

突然の事だったとはいえ、勇を胸に押し付けた。しかも自分で。

悔やんでも、悔やみきれない……これで、私は世間でいう淫乱女なんだー！地面を何度も踏みつけながら、被害妄想を肥大化させていく咲であった。

浅見新都は昼間なのに、人通りが激しく、車道は渋滞だ。

そんな新都も、路地裏は薄暗く、人は居ない無人の空間。そこに誰かが言い争っている。

一方はOLのような女性で、もう一方はスーツ姿の男性だ。どうやら、同じ職場で働いている者同士らしい。

「いい加減にしてよ！もう貴方とは終わったの！」

口を尖らせる女性、

「どうしてだ！理由を教えてくれ！」

必死な様子の男性。どうやら、恋人の別れ話をしているらしい。

「あのね！これ以上付きまったらストーカーとして警察に通報するわよ！？話はこれで終わりだから、さよなら」

女性は憮然とした態度でそう言うと言った踵を返して歩き出す。その女性の言葉で、男性の中の理性が崩れた。

（ふざけるなよ……これでは俺は完全な負け組ではないか！）

男性は女性の後姿を睨みながら、

（俺は勝ち組なんだよ！俺がふられるなんて事は）

女性の後姿に向けて、片手を翳す。

（お前はここで死ぬべきだ！そうすれば、俺は勝ち組で、お前は負け組だ！！）

翳した片手を横に薙いだ。その次の瞬間、女性の細い首が宙を舞い、グチャッ！と地面に落下すると同時に首を失った体は地面に崩れ落ちる。

切断された体の傷口からは噴水のように血飛沫が周りを濡らして、あつという間に路地裏の地面は地溜まりになる。

男性の片目だけは薄暗い路地裏にボンヤリと光っていて、顔は大きく歪んでいる。

「はははっ！これが俺の誰にもない能力だ！！お前とは出来が違うんだよ？このメス豚が！！」

斬首された女性に怨嗟を吐き捨てながら、愉快そうに大きな声で笑う。

地面に落ちている女性の首の表情には、恐怖が微塵もなく、苦痛の色すらなかった。

伏見の表札……この周りの家よりすこしばかり和風で大きい建物が、私の家だ。

魔除けであろう狛犬が左右の門の上に置かれていて、逆に魔を呼び込みそうな感じで、無駄に庭内に池がある。

昔ながらのガラガラなる扉を開いて、脱いだ靴を玄関にキチンと並べる。最低限のマナーという事で、毎日やっている。

玄関からフローリングの床を歩き進んでいくと、横から重たい何かが抱きついてきた。

中学3年生になった、私の妹である香奈だ。

「重い……いい加減抱きつくのは……」

「だって〜！お姉ちゃんの体って温かくて気持ち良いんだもん」

引き離そうとするが、中々離れずにしがみついている香奈……い  
つも大変だ。

（何で、こんな重度のシスコンになったんだろう……）

咲は内心で、愚痴を言いながら、やっとの事で香奈を引き離す。  
力が強くなってきた性が、最近は抱きつかれた時の衝撃も増して  
いる。きっと、体重が増えたんだろう。

香奈は廊下を歩いていく咲に短く、

「お姉ちゃん、口元から血が……」

「え、ああ すこし輸血し過ぎたかな」

香奈に指摘された咲は口からすこし漏れている赤い血液に気付く  
とすぐに利き腕の左腕で口を拭くと、苦笑い気味で言いながら自分  
の部屋に入っていく。

部屋に入るとすぐに引き戸を閉めて、その場で喉まで逆流してい  
た血を吐血する。

足元の畳は深紅の血液が滲みこんでいて、一部が赤く変色してい  
る。吐血した血液の量は40ml程度で、これくらいなら何の影響  
もない。

ただ、余分な血を外に出したただけだろうと、咲はそう解釈すると  
袖に血の付着したブレザーを脱いで、ハンガーの掛かった壁に掛け  
る。

締めていたネクタイは片手ですこし緩めて外して、部屋の片隅に  
置いてあるだけの学習用机の上に放り投げる。

吐血した血は面倒だから拭かない。畳が勝手に吸い取ってくれる  
から拭く必要性がないからだ。

咲は夕焼け色に染まっている空を窓越しから見上げながら、片耳  
に刺し通しているピアスを右手で触る。

このピアスが普通のピアスじゃない事を知ったのは今から2年前  
の冬の事……『法縁』って日本の宗教団体の榎木と名乗る30歳前  
後の地味な男性に街で声を掛けられて、勧誘を受けた。

もちろん、最初は門前払いで勧誘を断ったが、榎木はある条件を

提示してきた。

『化け物退治に手伝ってくれるなら、ピアスと何ですぐに吐血する理由を教えてやる』と、すぐに吐血する理由などどうでもよかったが、ピアスの事だけは興味があつて、勧誘を受けた。

この世界には人間以外の知られていない人種が存在するらしく、『血族』と呼ばれる吸血鬼は12の一族に分類されているらしく、十二支に別けて呼んでいるらしい、と榎木は説明してくれた。

そして、人間の中に変な特異能力を発現した人間の事も。

法縁の仕事はそう言った化け物を仕留めて隠蔽する事らしく、どうやら私も化け物指定にされているから、私は説明を受けたその日から、法縁、榎木と接触していない。

咲は左手に力を込めて、

「無明」

短く発言した。一瞬だけ左手から電撃のようなモノが発光すると、鞘のない抜き身の刀が具現される。

このピアスは『反故』と呼ばれる神具で、どうやら、一本の刀を保管、具現出来るらしい。左手に握る日本刀は結構凝った作りで、柄は滑らないように黒い絹の糸と金の絹の糸が何重にも巻きつけられていて、鐔には桜の花びらが数枚彫りこまれている。

咲の身長は156センチだから、刀身の方がすこし大きい。扱い方は自分で知ったが、気を抜くとすぐに具現した刀は紫色の粒子に変わって、消える。

一日一回は、こうやって刀を具現させている。護身用にはなるので、いつでも出せるようにしとかなないと護身には使えないから、訓練はしている。

でも、私が得意なのは剣術ではなく、合気道だ。華奢な体なので見た目以上の力がない。そこで、相手を力を利用する護身用武術の合気道を昔から習っていて、今では師範にも勝てる。

剣術はすこし噛んだ程度で、ほとんど太刀筋は自己流で、直訳す

ると、下手だ。

外から、町内放送が薄っすらと聞こえてくる。

ただ雲が夕焼け色の空を漂っていて、すこしずつ落ちている夕日を、窓越しで咲は碧い瞳をすこし細めながら、眺め続けた。

### 3話 学校風景

静謐な早朝に、蒼く澄みきった空には薄い雲が一つだけ浮かんでいる。

部屋の隅の壁に背中を預けている少女は静かに、瞼を開いた。綺麗な碧い瞳はすこしだけ、潤んでいる。

昨日、夕焼け空を眺めていて、そこから記憶が途切れている。どうやら、知らない間に寝てしまったらしい。

にちがいで起こしたのか、首が痛い。白い制服とスカートはなぜか乱れていて、制服のシャツの胸元からはすこしだけ下着が覗いている。

吐血した血はもうすっかり畳に滲みこんでいて、何だか赤く黒ずんでいる。咲は片手で頭を掻きながら、立ち上がると机に置いていたネクタイを片手に掴んで、キュッ！とネクタイを締める。

乱れた制服とスカートは軽く両手で叩いて直す。ここで、ある嫌な感覚を口に覚えた。

吐血した性で、口の中が血で染まり、真っ白だった歯が赤く色づいている。鉄の嫌な味が味覚に訴えてくる。

唾液も血が混じっているし、口内は最悪だ。咲はすこし苦そうに口元を歪めながら部屋を出て、洗面台の方に歩いていく。

蛇口を捻って水を出して、両手を合わせて水をすこし掬って口に運ぶ。数回嗽をして、口内の血をすべて洗い出す。

眠たそうな私が、洗面台の鏡に映っている。本当はもうスッカリ目が覚めているのだけど、寝起きの顔は酷いモノがある。

咲はそのまま洗顔をすると、部屋に戻って壁に掛けていた紺色のブレザーを制服の上から羽織る。

化粧はしない。化粧の技術がないからで、前に一度やって失敗した経験もある。

だけど、髪は束ねる。後ろ髪を首筋の方で下げたテールするよう

に白いリボンで縛る。いつもは束ねたりはしないが、今日はすこし風が強いから、束ねた。

鞆は昨日学校に置き忘れたらしく、今日は手ぶらで登校する。高校の正式名称は星光国際高等学校、（略して星光高校）

朝食は食わず、準備をしたらすぐに玄関で黒いスポーツシューズを履いて家を出る。高校は途中まで病院に行く道を通るが、十字路を右折して真っ直ぐ歩いていけば、すぐに高校の正門が見えてくる。高校の周りは高さ2メートルくらいの柵で囲まれていて、不審者が敷地内に入るとすぐにわかる。そのためか、早退する時は目立ちたくなくても、目立ってしまう。

正門を通った直後、突然後ろから背中を思いっきりぶつ叩かれる。「いやー！今日も素晴らしい蒼天だね」

陽気で高い声が、背中を片手で摩っている咲は振り返る。同じ制服だけれど、ネクタイはしていない髪はライトブラウンでボブカットの女子が馬鹿に上機嫌で立っている。

「……果歩、お願いだから、背中を思いっきり叩かないでよ……本当に痛い」

「目覚めの一発だから、気にするな！」  
かなりマイペースな口振りで、果歩は言いながら咲の肩を軽く数回叩く。

咲の碧い瞳は泳がせながら、並走するように横を歩いている果歩の横顔を見ながら、

（何で、毎朝背中を叩かれるんだろう……）

内心でそう思うと、ため息が漏れる。

正門から生徒玄関まで歩き進んで、コインロッカーのような下駄箱に靴を入れて、室内用スリッパに履き替えて、下駄箱を開くための鍵をロッカーから取り出して、鍵を閉める。

盗難防止のため、始業式の日には下駄箱をすべて、駅前のコインロッカーに置き換えられた。総額は60万円以上の赤字だったとかで、現在は財政難みたいだ。

果歩とは同じ2年B組の生徒で、中学校の頃からの友達だ。教室内は朝なのに騒がしい。

席に座って周りを見回してみる。親しげに話している男子生徒と女子生徒、同性同士で話している生徒、すぐに視線は窓の外に逸れる。

教室内より、まだ外を眺めていたほうが、マシな気がした。

蒼天の空には、雨を降らすような、天気を崩す可能性のある雲は一つもなく、薄い雲だけだ。

（今日の時間割は国語、現代社会、数学、科学、音楽、HRだから……）

不味い、何も浮かんでこない。気だるそうに窓を外を眺めている咲の前の席から、

「おはよう。窓の外なんか眺めていて楽しい？」

勇が話しかけながら、前の席に座る。

咲は窓の外を向いている視線を逸らさずに、

「少なくとも、教室を眺めているよりは」

素っ気無く答える。勇は『そう』と同じく素っ気無く言うと、

「昨日はありがとう。もうすこし遅く咲に腕を引っ張られてなかったら、今度は僕が輸血を受ける羽目になるところだった」

感謝を言葉をシレッと口にする勇、どういう訳か、咲はすこし顔を赤くしている。

腕を引っ張った際、勇を自分の胸に押し付けた事を、鮮明に思い出してしまった。

「どうも……」

小声で言葉を返すと、机の上に置いている両手をグー、パー、と握ったり、開いたりを繰り返す。誤魔化しているつもりだ。

勇は手提げの鞆から、国語の教科書と大学ノートを取り出して、机の横に重ねて置いて、最初の授業の準備を済ませる。

そして、勇は後ろを振り返らずに、

「あ、そうそう。すこし前に廊下で朝倉達と話したら、学校の近



場に美術館が出来たらしくてさ、咲は日曜日に用事とかある？」  
暇か、と咲に訊ねた。

どこかの路地裏の入り口には、『立ち入り禁止』と書かれた黄色いテープで封鎖されている。

薄暗い路地裏の冷たいアスファルトの地面は乾いた赤い血痕が干上がった池のようになっていて、白いシートで包まれた物体が転がっている。

シートに包まれているのは斬首された女性の死体。そして、カメラのシャッターを押している鑑識と、刑事のような風貌全開の渋いおじさんが佇んでいる。

「奇怪な死体だね」こんなに、綺麗に首を落とされた死体を見たのは、初めてだ」

「そうですね、普通の刃物では、こんな風には殺せませんよ」

刑事の言葉に、鑑識は反応するように言葉を返す。

「ああ、落とされた首の表情に、苦痛も恐怖もない。一瞬で首を切断出来て、痛みを感じない程鋭利な刃物なんて、実際にあるモノか？」

路地裏の壁に背中を預けながら、刑事は鑑識に訊いた。

「あると思いますが、到底、持ち運べない代物ですよ。レーザーなんかで切断したんなら痛みは感じないと思いますが……」

鑑識の答えを、刑事は途中から代わりに言う。

「それだったら、切断面に焦げる。だが、この死体にはそんな跡はないから、レーザーの可能性は皆無。とりあえず、この女性の身近の人物や出来事を探って、犯人を捕まえるさ」

「それしかありませんからね」

鑑識は最後の一枚になったカメラのシャッターを押しながら、刑事の言葉に賛同する。

咲は窓の外から視線を前の席に座っている勇に向ける。

「日曜日は暇だけど……突然なに？」

「実はさ、その美術館はオープンして数日間、無料でさ。金払わな  
いで見られるから、朝倉達が日曜日に行かないか？って話になった  
んだ。咲も行くよね？」

勇は咲の質問に答えると、最終確認としてもう一度訊いてくる。

「良いけど……」

咲はすこし首を頷かせて、線の細い声で答えると、勇はニコリと  
微笑む。

勇の笑った顔を見ると、妙な安心感を覚える。

と、ここで8時15分のチャイムが鳴り響いて、それからす  
ぐにクラスの担任が出席簿を持って、教室内に入ってくる。

担任の名前は霧島紅葉って名前。霧島は黒板の真ん中のすこし前  
方にある机の中間に立つと、よく通る何だか弱弱しい声で、

「メガネ君、号令お願いします」

机の上に出席簿を置きながら言う。そして、真ん中の一番前の席  
のグルグルメガネを掛けた男子生徒が立ち上がり、

「起立！」

咲以外の生徒はみんな席から立ち上がる。

「早朝から夕方まで全力一発！」

どこぞの生徒会長が考えた意味不明の挨拶を、咲以外の生徒は皆、  
やる気のない声で合唱する。

「着席！」

メガネ『本名・関西光世』君は変に甲高い声で言うと、生徒全員  
が着席する。

咲は毎朝、この挨拶の光景について、

（馬鹿みたい……）

呆れながら内心で思う。霧島は、はい、と短く言うと教室内を見  
渡して、出席簿に黙って記入していく。

まだ、席替えなどを行っていないから、見渡せば出席状況がわかる。そのため、名前を呼ばない。

出席簿の記入が終われば、すぐに本日最初の授業がスタートする。午前の授業は適当にノートに書き写して、説明を聞いて過ごす。もちろん、授業内容は記憶していない。

高校生活で一番楽しくない時間は、授業中だろう。将来あまり役に立たない無駄知識を勉強する必要性はあるのだろうか？例えば護身術なんか、痴漢対策の勉強をした方が実用的で、勉強する価値があるのではないかと、たまに思う。

昼休みはいつも、学校の裏庭で過ごしている。西校舎の裏の裏庭には、一組の青いペンキが塗りなおされたベンチと、日よけ代わりになる大きな針葉樹が数本植えられている。

咲はベンチの背凭れに背中を預け、両手を膝の上に置いて、スー、と微かな寝息をたてて、気持ち良さそうに寝ている。

針葉樹から微かに漏れる木漏れ日は、地面に水溜りになっている赤い液体を照らしている。

裏庭は咲のお昼寝スポットであり、唯一のプライベートな空間であり、吐血して人目に付かない場所で、寝る前にはここで一度吐血している。

この場所での吐血は、もう既に習慣であり、癖のようなものになっている。人間の体は食事などを行う毎に、血や脂肪、エネルギーなどを作る活動があり、余分に増えた血はこうして、裏庭で吐き出す訳だ。

一日一回こうして吐血すれば、すこしは吐血するタイミングは操作出来る。

本当におかしな体質だ。

風がすこし吹きぬけて、咲のすこし長めの前髪を揺らした。一時の一番穏やかな時間……。

#### 4話 絵画の鑑賞

日曜日の朝、スズメの鳴き声が窓の外から室内に流れてくる。

赤く黒ずんだ畳の一畳横で、布団も敷かないで横になって大きなサイズの飾り気のない白い生地シャツを着た咲が寝ている。

下半身は下着だけしか着ていなく、ブルブルのシャツの縁からはあまり焼けていない白い緩やかな脚線は何だか色っぽい。

すこしすると、碧眼をゆっくりと開いて、むくり、と上半身を起こす。

片目を軽く片手の手の甲で擦りながら、最近の出来事をぼんやりと思い出す。記憶を数日前まで巻き戻すと、今日の活動内容が決まる。

勇と朝倉達と一緒に美術館に行く。そんな約束を数日前にした。

ボー、と窓の外を眺めた後、両手を畳の上に置いて、体を押し上げるように立ち上がる。

立ち上がるとすぐに寝巻きのブルブルの白いシャツのボタンを外して、ブルブルと足元の畳の上に落とす。

シャツを脱いだら、黒の大人っぽい下着が現れる。そして、鏡の傍に置かれている存在感の少ない筆筒の中から、畳まれた涼しそうでキリッとした定番のような白いシャツを一着取り出して袖を通して着ると、カジュアルなジャケットをシャツの上から羽織る。

下はジーンズにしようかと、すこし悩んだが、スカートに決めた。理由はジーンズは4段式の筆筒の一番下で、スカートは上から3段目。しゃがむのが嫌だったただけなのだ。

多数のスカートの中から、無造作に片手をつっ込んで、一つ取り出す。

楊柳素材のブラウンロングスカートだった。咲は何でもよかったのか、すぐにスカートを履いて、黒い靴下を履いた。

これで、仕度は終了。

ベルトデザインの二つ折り財布をどこからか出すと、ジャケットと下のシャツの胸ポケットに入れて、部屋を出て、廊下に出る。シーンと物音一つない廊下……どうやら、誰も居ないらしい。

咲は真っ直ぐ玄関に歩くと、黒のスポーツシューズを履いて家から出る。

今日の空は、何だか曇り。薄い灰色の雲をすこし見上げた後、  
(雨は 降らないかな)

軽く天気を予想。雨は降らないただの曇り、そんな咲の予想は70パーセントの確立で的中する。この70パーセントの確立は、過去の記憶から算出された数字である。

待ち合わせは、駅前の噴水の前。

咲は淡々とした足取りで、歩いていく。

新都のオフィスビルの密集地。

透明なガラス製自動ドアの横には『株式会社リーベル』と書かれた黒い大理石がコンクリートの壁に張付けてある。

自動ドアを抜けると開放的なロビーに出た。社員達が忙しそうに出入りする中、隅っこの方で渋いおじさんと若いスーツ姿の男性が話している。

「突然ですみませんね。私の名前は萩原と言います。元彼女だった女性が残念な事になりましたね」

渋い見た目に似合った渋い声。

「ああ、残念ですよ。それで、あいつを殺した犯人は見つかったんですか？」

男性はわざとらしい口振りで、萩原と名乗った渋いおじさんに訊いた。

萩原はすこし目を細めながら、首を左右に振って答える。

ここで、男性は腕につけているブランド物の腕時計を見て、

「そろそろ、会議の時間なので、今日は失礼」

男性はそう言うつと微かに口元を歪めて、先にあるエレベーターに歩いていく。

微かに口元を歪めたのをしっかり見ていた萩原は、すこし笑みを浮かべて、

「気持ち表に出やすいな」

と渋い声をすこし鋭くさせて言う。

犯人は恐らく、あの男性。だが、証拠がない。

いや、証拠は確かにないが、斬首した方法がまだ、わかっていない。

鑑識の調べでは、こんな風に切断出来るのは鋭利なダイヤモンドカッターか、ウォーターカッター……工業用の大きな機械で殺したとは思えない、との事だ。

そんなモノを、一個人の人間が所有出来る訳もなく、持てるはずがない。

そこをクリアしなければ、あの男性は逮捕出来ない。

エレベーター内に消えていく男性の姿を、萩原はただ見送っていた。

駅前の噴水前はどこかに出かけるのであろう家族、若い女性に若い男性、中年のおじさんからホームレスといったバリエーション豊かな人々が行き交っている。

その中に、同じ学校の男子生徒と話している私服姿の勇の姿がある。

普通の高校生の私服といった感じの涼しげな服装の勇と話しているのは、同じクラスの男子生徒の朝倉、小池、遠藤である。

朝倉は明るい元気な少年で、小池は体育会系で、遠藤は適度に喋るちよつとしたイケメンだ。

それからしばらくして、私服の咲が登場する。

勇以外の男子生徒は滅多に見た事のない咲の私服姿。朝倉はすこ

し眉間に皺を寄せて、

（制服も良いが、私服もまた……）

内心で思った。

すこし、沈黙の後に勇が口を開く。

「じゃあ、全員来た事だから行こう」

一時的に仕切る勇の言葉に、朝倉、小池、遠藤は賛同して、美術館に向かって歩き進んでいく。

美術館に向かっていている途中、咲はずっとそっぽ向いたように空を見上げながら歩いている。

その前方では、男子達>>勇も含む<<が何やら話している。

「俺さ、てつきりシャツとジーンズで来ると思っていたんだけど」

朝倉は言う。

「俺も、何だかオシャレな感じで驚いた」

小池は言う。

「そうだな」

遠藤は言う。

各自、似たような事を言う。もちろん、この会話は後ろを歩いている咲に聞こえていない事はいうまでもない。

勇はその会話に対して、すこし苦しい笑みを薄っすらと浮かべて、ただ聞いている。

「伏見ってさ、クラスでは果歩と勇としか話さないだろう？もしかして、人付き合いが苦手？」

朝倉は両手を頭の後ろで組みながら、勇に訊いた。

勇はすこし言葉を詰まらせて、

「さあ、近くの病院とかに入院している患者と話してるとこ見かけるし……ただ、単に面倒なだけかもね」

質問の答え、結論を言った。

その後ろでは、空を見上げたまま横目で朝倉達を見ていた咲は、（何を話してるんだろ？）

内心でそんな疑問を思った直後、

（まあ、どうでもいいけど）

結論に達して、横目の綺麗な碧眼を空に向ける。

本当はすこし気になるが、今の歩く速度を変えたくはなかった。平凡でどうでもいい理由……そう、私の思考は本当にどうでもいい事しか考えられない。そんな人格に育ったから。

勇は空を見上げている咲を一度横目で見ると、朝倉が咲に聞こえないくらいの声で、

「実はさ、俺は女子生徒全員をランクをつけてんだー」

陽気で上機嫌な様子で、ジーンズのポケットの中からAUで最新機種携帯電話を取り出して、画像をすべて呼び出す。

そして、携帯の液晶画面に『伏見咲：外見A A＋：性格A』と表示された文字の上には生徒手帳の更新のために撮った咲のすこし笑った画像がある。

滅多に見ない咲の笑った顔なので、保護設定になっている。保護設定をすれば、消去する際にパスワードを入力しないと消去出来ないの、間違って消去する事は、相当寝ぼけてない限り、まずない。静かな歓声が聞こえた、と後ろを歩いている咲は思う。

この画像に、小池と遠藤は同じ事を言う。

「それって、盗撮じゃないか？」

「当たり前だろ？女子全員で何百人居ると思ってる？許可なんてとって撮影してたら数ヶ月はかかるって」

自慢気に話す朝倉。その会話に勇は割り込んだ。

「朝倉、いつか痛い目を見るよ」

軽い警告の言葉だった。朝倉は、気をつけるさ、と言って、携帯をポケットの中に戻す。

秩父山中には雨が降っている。山中の崖になっている場所に、大きな禅寺が建てられている。

この禅寺の名称は『虚空』と言い、周りに植えられている神木に



は結界に似た偽装障壁が張られている。

その一つの神木の前に佇む、灰色のシャツに黒いズボン姿の30歳前後の地味な男性。

あまり飾らない黒い短髪は雨で濡れていて、前髪の一部から雫となつて、雨水が地面に落ちる。

寺の方から、若い女性の声が聞こえる。

「榎木ー！」

最初は優しい感じだったが、次第に、

「おらっ！！榎木出て来い！！！」

闇金融の取立てに來た怖いお兄ちゃんみたいな感じに変貌する。

男性はため息をつく、すこし大きな声で、

「聞こえてる！さっさと用件を言えよ！！！」

「伏見市の新都で変死体が発見報告！血族の可能性は皆無！聞いたら伏見市に直行、犯人発見した対処法は『可能な限り勧誘。殺意思考が強かったら、その場で殺せ』よ！！！」

女性の声は停止する。雨で地面の土はぬかるんでいて、足場はよく滑る。

男性の名前は榎木。血族を殺すための組織『法縁』に所属する人間で、デスサイズ『処刑人』の砲術を得意とする人。

「この絵は何を表現しているんだ？」

美術館内の入り口付近の飾られた平面の開いた箱の絵の前で、朝倉は誰に訊いている訳でもない質問を言う。

朝倉の質問に、遠藤が静かに答えた。

「閉ざした心を開いた時の状態を箱として表現している」

冷静過ぎる眼差しは真剣で、この絵に深い理解を覚えてる様子だ。

一同は、声を揃えて

「あ、そうですか」

普通じゃねえ、遠藤って時々わからなくなる、なぜわかる？、慣

性が豊かな、と各自内心で遠藤を意識する。

……私の遠藤に対する認識が『珍しい人』に変換された。

続いての絵画は、これもまた訳のわからない奇妙珍妙な絵だった。色んな色が球体のように混ざり合い、真ん中には亀裂が入っている。作者は『ボヘミア・ウサンクサイ画伯』で、名前から胡散臭いと言っている。

この絵に対して、遠藤の反応はこれもまた冷静で、

「人の記憶の混ざり合った球体に表現して、亀裂は消失する事を表現している」

遠藤以外理解出来ないであろう、評価は賞賛に値している。

続いて、有名なモナリザの絵画。遠藤はすこし眉を顰めて一言。

「駄作」

多くの芸術家、評論家が賞賛している有名極まりない絵画を、問題外と言わんばかりに一蹴する。

これには、咲は妙に納得して、朝倉・小池・勇は内心で揃えるように、

（お前の基準はよくわからん）

合唱するように思った。

そこからは、自由行動と称した『好きな場所を勝手に回ってる』タイムがスタートする。

朝倉、小池は遠藤の反応が面白いのか、変な意味不明な絵画を見回り、咲と勇は絵画以外の芸術品を見回る。

## 5話 勇と咲

この美術館は第1展示回廊には絵画を、第2展示回廊には骨董品を、第3展示回廊には石像、銅像、人形を展示している。

朝倉達は第1展示回廊を回り、咲と勇は第2展示回廊を回っている。

骨董品は様々な種類があつて、咲は小汚いハニワをボーと眺めている。

僕は何となく気まずい空気を察知して、話題を頭の中に静かに振り絞り、言葉を絞り出した。

「そのハニワはどう思う？」

咲はそう僕に訊かれると、ハニワから視線を天井に逸らして、

「別に、ただ……」

中途半端なところで言葉を濁す。

勇はしつこくない程度に、

「ただ？」

と短く訊いた。咲は唇をすこしかみ締めると短く言った。

「何でもない」

質問と話の流れを打ち切る一言だった。さすがに、これ以上はこの話題を続けるのには無理があると感じた勇は、次の話題を脳内で模索する。

咲から半歩引いた後ろを歩く勇は、素直に芸術鑑賞に勤しむ事にした。相変わらず訳のわからない骨董品の数々だが、妙に見続けてしまつのはなぜだろう。

「ねえ」

唐突に、咲は立ち止まると短く言う。

「なに？」

僕は咲と同じ短い言葉で訊いた。咲は勇の方を振り返る。

「もしも、未来が視えたら、勇はどうする？」

咲の質問は、勇には理解出来なかった。予想外の質問だった。

いきなり、『未来が視えたらどうする？』なんて訊かれて即答出来る程、僕の頭は出来ていない。勇はとりあえず、

「よくわからないな」

そんな曖昧な言葉を返した。この場合は多分、もっとも妥当な言葉だと僕は思った。

咲は綺麗な碧眼の瞳をすこし悲しそうに細めて、

「変な事訊いて、ごめん」

線の細い声で謝る。けど、悲しそうに細めたのは一瞬だけで、今度はクスツと笑みを浮かべながら、

「忘れて」

とすこし声を弾ませて言うのと踵を返して歩き出す。

忘れてと言われて、忘れる事など出来るはずもない。だが、言葉を言い返せばこの話は終わりだと告げているので、勇は何も言わずに咲の後ろを歩いた。

## 5話 勇と咲（後書き）

この話だけ咲視点から勇視点に移っています。

## 6話 始まりの音色

美術館の帰り道に見上げた空はオレンジ色に染まり、空を覆っていた雲はもう空の彼方へ飛んでいつている。

私は朝倉・勇達と別れて、何となく公園のベンチに腰を下ろしている。

公園に来たのには理由はなく、ただの気まぐれである。夕方なのに、公園内の遊具ではまだ子供が数名遊んでいる。

碧眼の瞳をすこし細めながら、公園内の風景を眺めた。細めた碧眼は、どこか悲しそうである。

「やあ、碧眼のお嬢さん」

突然、前から優しげな老人の声が聞こえた。そして、咲は細めていた碧眼をすこし大きく見開いた。驚いた。

なぜなら、先ほどまで、私の前にはこの目の前に立っている『老人』は居なかったからである。

絶句した後、咲は口をすこし開いて、一言。

「さっきまでは……」

「魔眼は、人間誰もが潜在的に持ち合わせている特異能力。けれど、ほとんどの人間は発現までには至らない。さて、碧眼のお嬢さんはその眼をどう生かす？ どう殺すのかな？」

老人の言葉は、私には理解出来なかった。理解する気すらなかったのかもしれない。

咲は碧眼の瞳を静かに閉じて、

「答える前に、あなたは誰？」

老人の名前を訊ねた。当然といえば当然の質問だ。

「私かね？ 答える事は良いのだけど、今はその時期ではない。ただ、『聖殿』の使用人だと知ればいい。未来を視過ぎない方が気分は楽だ」

そう言つて、老人は片手の人差し指で咲の額を軽く押した。

押された次の瞬間、視界がグラツ！と地震でも起きたかのように、激しく揺さぶられて、視界は消失する。

倒れた感覚を感じたが、すぐに感覚がなくなって、思考が完全に停止した。

ただ、最後に聞こえた気がした。『死は視ない方が幸せ』と……。

古代ギリシヤを思わせる。石柱が幾つも並んでいる空間には、景色がなかった。

床のない透明な足場に伝わる足音は湖に雫を落としたように波紋が広がった。

老人には名前がない。あるのは、役職名『聖殿の使用人』だけだ。『使用人……よくそんな古臭い名前を使用するなあ』

男性の声が先に聞こえると、次に女性の声で復唱する。

そして、闇一色に染まっている奥の方から、一振り大きな斧を担いだ瑠璃色の瞳の少年が現れる。

少年の年齢は10歳程度で、服装は全身黒装束姿である。ドスン！と担いでいた大きな斧を透明な足場の上に落とすように置くと偉そうに、

「おい、勝手に『聖殿』を出たと思えば、土産一つも持って来なかったのか！？全く、使用人が聞いて呆れるな」

悪態を吐き捨てるように言って、老人を睨んだ。

老人はヘラヘラとした笑みを浮かべながら、  
「弁解はしません。ですが、それなりに『面白い事』になりそうですよ」

「面白い事？」

「未来を映す碧眼と、虚空を斬る魔眼……法縁を上手く殺せそうだから」

ヘラヘラとした笑みは、冷たい笑みに変わる。怖気さえ感じさせ

る程の老人の笑みは、何かを称えているようにも思えた。

少年は、悪趣味な笑いだ、と毒を吐き捨てた。

「おや？あなたにそう言われるとは思いませんでしたな。血族・寅の中で、もつとも殺戮を好んでいる『斧の鬼』らしからぬ言葉だ」

「黙れ、たまには違った台詞を言う事もある。それにな」

「それに？」

「あいつが、怒り出す」

斧の鬼と呼ばれた少年は足場に置いていた斧を片手で器用に担ぎ上げると、また闇に消えてしまう。

老人も、やれやれと言った感じで首を横に振ると、同じく闇に消えた。

この空間は『聖殿』と呼ばれる血族の神殿。歪んだ空間の歪の中に存在する無限の闇が支配する空間だ。

視界が開けると、見馴れた公園の風景が広がっている。

けれど、もうすっかり日は落ちて、夜になっている。空には欠けた月が昇っていて、辺りはシーン、と静かになっている。

軽い頭痛に似た脳震盪を起こしている性が、足がどうしてもグラついてしまう。

咲はベンチの背凭れの上に片手を置いて、体を出来る限り押し上げて、立ち上がる。

妙な気分……すこし前までの記憶が喪失している気がする。欠けた月を見上げて、一度深呼吸をする。

両手は左右に広げずに、すこし後ろで組んでいる。深呼吸をする事に意味はないが、強いて言うならこの頭痛に似た脳震盪をすこしでも抑えよう。そんな気持ちだった。

深呼吸したら、公園の出口の方に向かって歩き出す。家に帰らないと、生徒指導を受けそうだからだ。

明るい月の光で、車道と歩道を仕切っているガードレールに影が



映る。同じ動きをする影を、咲はすこし楽しそうに微笑んで、歩きながら見る。

しばらく歩いていると、シャッターを下ろした店の前に、ギターを弾いているボロイコートを着た40歳前後の男性が座っている。

こんな人を何て言うんだっけ……思い出せない。

咲は男性からすこし離れた斜め前方に立ち止まり、一曲だけ最後まで聴いた。決して上手ではないけれど、何だか聴いていると落ち着く。

ギターの音色が止まる。そして、短く咲に一言。

「上手とは、お世辞でも言えないだろ？」

「はい……」

咲はすこし笑うように目を細めながら、線の細い声で答えた。

そのまま、咲は言葉を付け足して、

「でも、落ち着く良い曲だった」

そう言つと、男性は、ふっ、と笑みを浮かべて、

「ありがとな。お嬢ちゃん」

「どうも。さよなら」

律儀に一礼をして、20メートル程前に走つて、歩く。その場から咲の姿がなくなると、男性はギターを弾く。

曲名は 『最初の音』

## 7話 冬の猫

私は4年前の冬の月に、魔眼が発現した。

あの日はとても寒い雪の日で、私は一人で近所の歩道をただ歩いていて。近所の同じくらいの歳の子が友達と仲良く歩いている。

羨ましかった。あんな風に笑って歩きたかったけれど、今の私は笑えない。

白い大きめのサイズのコートを着た咲は、誰も居ない公園に入る。ベンチに積もった真っ白な雪を、手袋をした片手で払い落として、腰を下ろす。

見上げれば、真っ白な雲から真っ白な粉雪が降ってくる。

しばらく、そのまま見上げていると、足元から猫の鳴き声が聞こえた。足元に視線を逸らせば、真っ白な毛の猫が居た。

人に馴れている感じで、ニャーニャーと可愛らしい鳴き声を発している。私はベンチに座ったまま、その猫を抱き上げて、膝の上に置いた。

何度か、猫の頭を軽く撫でた。猫は撫でる度に、つぶらな瞳を閉じて、その顔は喜んでいるようにも見える。

咲はすこしだけ、碧眼の瞳を細めながら、口元に薄っすらと笑みを浮かべた。

その時、咲は慌てたように両手を合わせて、口を塞いだ。手袋から、赤い血が、一滴、二滴と白いコートに落ちた。

吐血だった。1年前から、毎日数回はこうやって、血を吐き出す。もちろん、病院で検査も受けた。メスで体も切られた。けれど、原因は不明だった。

医者は私に一言だけ『命には別状はないと思われます』断言して。よううで、曖昧な言葉。でも、私はそれで納得した。

ニャー、心配でもしてるような猫の鳴き声。咲は猫を碧眼の綺麗な瞳で見ると、片手の手袋だけ外して、猫の頭を撫でた。

「心配してくれた？」

そう線の細い声で、猫に訊いた。猫は膝の上でゴロゴロと小さく温かい体を遊ばせている。

答えてはくれないのは当たり前である。なぜなら、猫はそんな生き物だから。

足元に捨てられた手袋には、赤い血がベツトリと付着していて、片手にしている手袋からは赤い血がまだ地面に垂れ落ちている。

息をすこし長く吐いてみると、白い息が見えた。すこしずつ、瞼が重たくなる。

寒いけど、あまり寒くない矛盾した感覚だった。空をすこし見上げたまま、ゆつくりと碧眼の瞳を閉じた。

口元からは、すこしだけ赤い血が漏れて、首筋を伝わり落ちる。知らない人が、こんなところを見れば、きっと救急車を呼ぶだろう。重症ではないけれど、重症に見えてしまう。その性が、人前では眠れない。

寝ている時に、血を口から流していれば、一大事と勘違いされるからだ。

私は雪の積もり始めたベンチに上半身を倒した。空を見上げるように倒したため、後頭部付近が冷たかった。

ペロツ、と猫は私の頬を舐めて、血が漏れている口元も何度か舐める。放置したままだったから、猫に拭かれてしまった。

ここで、もう片方の手袋を外して、地面に落とす。素手になった両手で、猫を抱えて、空に向かって掲げた。

（本当に、良い顔してる……）

笑顔に見える猫の表情は何となく良かった。そして、猫から手を放して、眠る。

猫は私の胸の上で一度弾んで、上手に地面に着地して、ベンチから遠ざかっていく。

完全に猫が見えなくなった途端に、変な映像が頭の中を横切った。私は閉じていた碧眼を開いて、ガバツと上半身を起こした。

車道の方から大きく響いたブレーキ音……何で車がブレーキを踏んだのかは知っている。

視えたから……あの猫は車に轢かれた映像が、視えたんだ。すこし先の未来が視えた……でも、すこしにも程がある。こんなにすぐ起こる未来なんか視えても、意味がない。ただの見殺しだ。罪悪感だけが残った。そして、涙が止め処なく零れてくる。

『私が、あの猫を殺した』　そう思うと、涙が止まらなかった。

## 8話 2箇所 of 病院

新都駅のホームに人が集まっている。

どうやら、電車がブレーキを掛ける前に、線路に人が落ちて、死んだらしい。

男性の名前は偉人芳人っていう一風変わった名前である。

その人の集まった場所から程近い売店の前に、携帯電話で会話している地味な男性の姿がある。

「勧誘する前に見切りをつけて、魔眼が使われる前に始末した」

「はあ？何で勧誘せずに殺したの！？」

大きな呆れた女性の声が、電話越しで聞こえてくる。

地味な男性 榎木は平然を装って、

「完全に殺戮の方向に眼が逝っちまった。それにな、あいつの魔眼は『空間を斬る』からな。肉眼では確認出来ない空間の刃なんて使われてみる？少なくとも、数十人以上の死傷者は確実に出る」

「それで、殺したと？」

「ああ、それに」

「それに？」

榎木はすこし息を吸い込んだ。

「血族が動いている節があった。それにな、妙だと思わないか？」

「何が？」

「あいつの魔眼は片手に力を込めるだけで発動する。過去をすこし調べてみたが、魔眼の片鱗を感じさせる出来事がここ最近まで存在していない。魔眼を意識的に発現させた実例はないから、意図的に魔眼を引き起こせる奴が居るとすれば、『使用人』くらいしか存在しない」

マシンガンのように話していく榎木。『使用人』とは血族の神殿『聖殿』を作り出した張本人である。

「そうね……とりあえず、日本全体に結界でも張って、身動き取れ

ないようにしとく?』

「いや、国一つを結界で覆うのは無駄だ。張るのはこの地域だけ…  
…使用人が居るとすれば」

『しばらくは活動停止だ、ね。止まっていってくれた方が探しやすい  
か』

「そういう事だな」

榎木はそう言うのと携帯を閉じて、ポケットの中に突っ込んだ。そして、売店のおばさんに一言だけ言った。

「プロイセンの煙草一つ」

プロイセン社の一番新しい煙草を購入した。価格は260円である。

伏見市には病院が2箇所ある。

一つは近所だが、あまり行かない『公苑会』、もう一つは3年前くらい前から私を診ている担当医、主治医の居る『春原病院』の2箇所。私はほとんど、春原病院に月数回は通院している。

実は、春原病院に通院している事は、家族しか知らない事であり、勇は知らない。

春原病院の入り口には、病院をすこしばかり見上げている咲の姿がある。すこし大きめの白いシャツに群青色のジーンズを着用していて、なぜか碧眼を隠すように光沢のある黒のサングラスを掛けている。

サングラスを掛ける理由は一つだけであった。

近所の人に見られたくはなかった。

学校の生徒や先生に知られたくなかった。

……面倒な事になりそうだから。

空は半分程度雲で覆われ、半分は蒼空。中途半端な空模様である。病院の構造は3階建て、2階、3階には6人部屋が二つ、個人病室が二つの2、3階の全部で八つの病室がある。

1階は受付、内科、外科それぞれの診察室があり、私が診察を受けるのは内科だ。

自動ドアから病室内に入るとすぐに、

「あ、咲ちゃん！」

年上の女性の細く高い声で、声を掛けた女性はナースではなく、外科専門の医者である。

タイトスカートスーツの上から白衣を羽織り、首には聴診器を提げている、妙齡の女性だ。

「楓さん……」

「ちよい待ち」

楓は咲の額に右手の人差し指で軽く小突いた。

「楓さんじゃなくて、『楓ちゃんか楓姉さん』と呼びなさいと言ってるでしょ？言う事訊かないと　メスで切るなんて冗談言つよ？」

「す、すみません……楓姉さん」

「素直でよろしい　陣内先生ならそろそろ診察が終わると思うから、内科の診察室に入って待ってたらいいよ。それじゃね」

手を振りながら、楓は行ってしまった。何だか上機嫌だったので、（競馬で勝ったんだ）

と内心で思いながら、楓の後ろ姿を見送った。

見送った後はすぐに内科の診察室に向かって歩く。

歩くとしても、直線で7メートル程度だが、患者の何人かに声を掛けられる。

内科の診察室のドアを数回ノックした後、間をすこしだけ置いてドアを開ける。

視界に入るのはまず、白いカーテンと黒のソファ。すこし奥に歩いていけば、目の細い温和な感じの男性の背中が見える。

そして、その男性は振り返った。

「2週間振りだね」

診察室には他の患者の姿がなく、男性はどうやら、カルテなどに目を通していたみたいだ。

咲はすこし、周りをキョロキョロと見回して、

「陣内先生……内装変えた？」

とりあえず、訊いた。

陣内は、ああ、と唸って、

「よく気付いたね。デスクは窓際に置いた方が明るくて良いから、それに、『指摘』されたからね」

「……でも、明るくなり過ぎてる」

木材だけで組み上げられたデスクは太陽の光を余計な程反射させていた。

咲はそう言つと、陣内の前の回転式の椅子に座る。

「いや、明るいに越したことはない。聴診器当てるから、後ろ向いて」

陣内がそう言つと、咲は椅子を反転、背中を向けて、服を胸部まで捲り上げる。

下着の紐の色で、何色かすぐにわかる。聴診器を当てて心音をすこし聴くと、左手を当てて、右手で軽く何度か叩く。

「ん？今日はどうしたのかな？顔が赤くなっているが」

陣内は私の顔の色を指摘した。咲は指摘されて、初めて自分の顔がすこし赤くなっている事に気付くと、すぐに捲くっていた服を膝まで伸ばした。

「何でも、ない……です」

恥じらいながら、咲は片言で言った。

陣内は咲の様子をすこし観察した後、妙な勘が働いた。

「学校で好きな子でも出来たのかな？」

確信はなかったが、さらに顔が真っ赤になった咲の様子で、確信した。

陣内は含み笑いを浮かべながら、

「咲はわかりやすいね。まあ、それをまた今度聞くとして……一日に平均で何回吐血している？」

最初は笑っていたが、吐血した回数を言う時の陣内は真顔だった。



咲はすこし言葉を濁して、

「……2回から3回」

「ふむ、輸血した回数か？」

「一回だけ……量は標準よりすこし少ない目」

素直にここ2週間以内の事を話す。陣内はすこし眉を顰めながら、  
「すこし、血を吐き出しすぎているね……これも、その眼の性かな？」

陣内は真剣な顔で、短く訊いた。

多分、眼の性だろう、と自分でも思う。

咲は正直に答えた。

「多分、眼の性だと思う……最近はずっと、学校の教室に居るだけで、誰かが転ぶ映像、ノートを落とす映像が視えてくる。距離を置いても、すこししか変わらない……」

その顔は落ち込んでいるようにも見える。実際は落ち込んでなどいないのだが、顔が自然とそうなる。

その話を聞いた陣内は短く、

「眼だけが原因なら、吐血は治療出来るかもしれない」

そんな前置きを言う、続けて本題に入る。

「視覚神経は断裂させる……何も見えなくなれば、未来なんて視えないはずだか」

「……そんなの、嫌だ……!」

大きな線の細い声が、診察室内に響き渡った。綺麗な碧眼は睨むように細めていて、すぐに泣き出しそうな顔になる。

「本気で言ってる訳ではないよ。咲に頼まれてもやるつもりもないから……とりあえず精神安定剤と鉄分補充錠剤と即効性のある睡眠薬を処方しておくから」

空気が悪くなったと感じた陣内は処方する薬の種類を言って、話を打ち切った。

真つ白だったカルテに診察結果が記入されていく。咲は下を俯きながら、内科の診察室から出て行った。

出て行く際には一回だけ頭を下げて一礼した。顔は下を俯いていたため、表情は見えない。

受付で処方された薬を受け取る。薬代、診察代の合計金額4600円という適当な金額を、顔を俯かせたまま支払った。

薬の入った白い袋を片手にぶら提げながら、病院から家に向けて歩いていく。

サングラスは……どこかに落としたらしい。

帰り道、不意に疑問を思ってしまう。何で、あの時大きな声を出したんだろう？

視力を失う事は嫌だが、視える未来の映像は失くしたい。

今はそう思うのだが、言われた時は違った事を思ってた。

5年前のあの日、私は『死』が嫌いになった。何もない空間が嫌だった。

視覚神経を切断する事で、視力は失われる。魔眼も消失する。

けれど、代償として闇を彷徨う事になる。誰も視界から居なくなる。

私は、それだけがどうしても嫌だった。

咲は空を見上げた。碧眼は太陽の光を受けて、輝いているように見えた。

そして、片耳に突き通していた、短剣を象ったピアスに軽く片手を添えた。『反故』と呼ばれる神具のようなピアスの有する能力は『内臓された一本の日本刀を自在に具現させられる』魔法染みた代物だ。

使う機会は……きっと、ないだろう。

辞書などに明記されている碧眼の意味は『外国人のような瞳。青い瞳』一言で言えば異人の瞳……別の人種の瞳だ……。

8話 2箇所の病院（後書き）

## 9話 水晶眼

血族の神殿>>聖殿<<は相変わらず古代ギリシャの神殿のような建物だ。

透明な床の上に、老人>>聖殿の使用人<<が口を開いた。

「何十年ぶりに帰って来られたかと思えば……冗談はやめてください」

その口振りには微かな怒りを感じる。

目の前に座っているギターを持った男性が、面倒そうに口を開いた。

「悪いが、冗談ではない。俺はここ数十年で100人以上の超能力者と呼ばれている人間と会ったが、ほとんどが拍子抜けのペテン師だった。透視するにしても、集中する時間が長すぎて、精度も全くないと言える。他にも、未来、過去、幽霊、魔術師にも会ったが、どれも似たようなモノだった。その中に碧眼の少女が居た。その少女は常時、未来と死を視る事が出来て、集中する事なく、精度も完璧だった。普通の人間なら、もう壊れているはずの精神には多少の後遺症のようなモノが残ってはいたが、心配性はほぼ皆無だった。俺はな、正直なところでは人間を全滅させたいほど憎んでいるし、殺意もある。けれど、俺はその碧眼の少女だけには『戦ってほしくない』と考えている。使用人はその少女で遊ぶつもりなんだろうが、そんな事をさせるつもりもないし、権利もない。少女の事は俺が監視する。これ以上は関わるな」

長々と説明を言う。

これには、使用人は舌打ちして、機嫌悪そうに眉を顰めた。  
そして、

「……わかりました。血族の十二支の中で最強と呼ばれる辰。>>隻眼の竜眼<<に勝てる血族・人間は皆無ですからね」

そう言うと言に姿を消した。

男性は持っていたギターを軽く弾いた。

決して上手くもない、けれど、下手でもないその音色は、何だか落ち着く。

男性は片目の視力がない。そのため、>>隻眼の竜眼くくの名前を受け持った。

黒い水晶のような瞳に映るギターの姿。

「未来を視れば辛くなる。死を視れば不幸になる。その両方を視れないようになるには……」

男性のそこから先の言葉は、聞き取れない。

ギターの弦が切れた。

音色は静かに消えていく……。

## 10話 湯豆腐

「今年の修学旅行（学校主催の合コン？）の場所はハワイです」  
担任の霧島紅葉が黒板の前で言った。

私以外の生徒はなぜか、歓声のような声を上げている。

教室内の状況を一言で表すのなら、『騒がしい』、の一言で済む。  
やる気のない碧眼が、窓の外を眺めている。

6月になったので、制服は冬服から夏服に衣替えした。でも、ただ紺色のブレザーを脱いだけで、あまり変わらないので、衣替えした気分は薄い。

本日の最高気温は知らないが、体感気温での予想は29度を表示している。

修学旅行は毎年場所を変える。

去年は沖縄だった……全校生徒で行くので、飛行機は3機に分割する。

いや、享年はほとんど貸し切りだった性が、飛行機代だけで経費を予想以上に消費したらしく、今年は多分、船で向かうのだろう。

昼休みの職員室前を通った時に聞いたので、知っているのだ。

今日は修学旅行の説明が終われば帰れる。

適当に聞き流しているだけ……そして、午後3時50分に終わった。

連絡のためのプリント用紙には、大きな2重丸の中に、『絶対！  
水着忘れないように！』と誰かの言葉が書かれている。

学校の帰り道に、咲はプリント用紙を両手でクシャクシャに丸めて、車道にポイ捨てした。

左右に分岐するいつもの道に差し掛かった時、突然眩暈のようなモノを覚えて、足がもたつきながら、近くのコנקリートで出来た壁に手をついた。

口からポタポタと赤い血が零れる。本日2回目の吐血だった。

1 回目は起きてすぐの事。久しぶりに布団を敷いて寝たから、いつも壁に凭れて寝る癖が悪い方向に働いたんだと思う。

白い制服の袖で口を拭う。

袖は白から赤に変色して目立ってしまうが、絵の具を零したと思えば気が楽になる。

>> 聖殿内部<<

「はあ！？何で俺が人間の監視なんかを！」

大きな斧を肩に担いだ少年が、不満を叫んだ。

「俺だって何かと面倒事があるからさ。『斧の鬼』って呼ばれてるお前には丁度良いかもしれんしな」

ギターを持った男性は面倒そうに頭を掻きながら言う。

『斧の鬼』と呼ばれた少年はマシンガンのように、

「ふざけるな！人間を殺すならまだマシとして、何で人間を監視しなけりやならないんだ！」

「おやゝ？俺は知ってるぞーお前が聖殿の奥で猫を大量に飼っている事」

「なっ！何で知ってたんだよ！？」

「人間はダメでも、猫は良いんだな？」

ギターを持った男性は嫌な含み笑いを浮かべながら言う。

これには、少年はそっぽ向いてしまう。

「なら、大丈夫だと思うぞ？あの少女は猫が好きみたいだから。それに」

「それに？何だよ」

「いや、監視してればわかってくる。それと、絶対お前の斧とか剣とかは使うな。あの少女の事だから、返り討ちにしたら泣き続けて大変になるだろうし、殺し合いなんかになったら、確実に怪我はするからな」

はい？

「ゲホゲホっ！！」

伏見の家の台所の方から、咳き込んでいる声が聞こえる。

沸騰している鍋の中には、かつお節でダシをとった湯豆腐があり、咳き込んでいる咲の横では30歳後半の女性が愉快そうに笑っている。

この笑ってる女性は私の母親だ。

伏見の家で碧眼なのは咲だけで、伏見の歴史を辿れば、碧眼なのは過去3人だけだ。

咳き込んでいる理由は、帰ってきたら突然腕を引つ張られ、台所に強制連行されて、突然湯豆腐を口の中に飲み込まされて、その湯豆腐が気管に入った。

「あら？咲ちゃんは本当に詰まりやすい子ね」

この咳き込んでいる原因は母親なのに、顔はすぐく馬鹿にしたような含み笑いだ。

咲は一度深く息を吐いて碧眼をジロリと細める。

捻くれた猫のような眼に、母親は引き攣った笑みを浮かべながら、  
「も、もう、いいかしらね」

母親がそう言った直後、咲の口からゴポツと赤い血が零れた。

台所の流し場が赤い血で濡れる。咳き込みながら吐血している咲の背中を、母親は優しく片手で摩った。

咳き込んだのは大体10秒くらいで、口を押さえていた片手の手のひらは真っ赤に染まっている。

「咲ちゃん……本当に体には何ともないの？どこか痛いとかないの？」

母親の顔からはもう笑みはなく、真面目に心配しているようだ。

咲は手の甲で唇を擦りながら、



「……大丈夫」

そう短く言うと、何となく顔に安堵させるような笑みをすこしだけ浮かべて見せた。

ポン、と頭の上に手を置かれて、撫でられる。

「咲ちゃんは我慢強い子だったからね」

母親はそう言うと、ニコリと笑って、

「でもね、辛い時は我慢する必要はないのよ？痛かったら痛いと言えればいいし、辛かったら辛いと言えればいい」

変に説得のある落ち着いた声で言う。

そして、母親は何かを思い出したように。

「そういえば、そろそろ修学旅行よねー今年は水着を選ばせてもら  
うわよー」

怪しい含み笑いを浮かべながら、ふふふつ、と笑う。

咲は何も言わずに、ため息を吐いて肩をすこし落とした。

## 11話 幼稚園最終

修学旅行まで後十日に差ししかかろうとしていた6月の夏。

私は午前の学校をすっぽかして、近所の『藍色幼稚園』で本日開催されている父兄参観日などという授業参観に参加させられている。なぜ、こうなったと言うと、昨日の晩の事。

「授業参観？」

風呂上りでポカポカしている内に寝ようとして、部屋に入ろうとした時に母親に言われて、言葉に？マークだけつけて返した。

「近所の晶子おばさんのとこの娘さんの子供が近くの藍色幼稚園に通っててね。明日はその幼稚園の参観日なのよね。何だか急に行けなくなったらしくて、そこで、一番暇そうにしている咲ちゃんにどうかなって」

「明日、学校ある」

ドアの前で短く言い切った。

母親氏はどうも、私の答えに文句や苦情があるらしく、顔にそのままはつきりと何か言いたいオーラを漂わせている。

ドアを閉めてさっさと寝たいと思いつつも、この漂うオーラがすごく気になって閉めれない。

話を打ち切りたいと必死で願いつつも、この雰囲気からして、良いと言うまで引き下がらないみたいだったので、

「……学校は午前休むよ」

ため息を吐きながらそう言うと、母親は満面の笑みを浮かべる。

「そっかそっか。子供は良いもんよ」私が咲ちゃんくらいの歳にはもうすでに彼氏20人以上居たんだから」

「馬鹿」

咲のドアを閉めると同時に言った言葉で、母親の含み笑いが消え失せた。

「ば、馬鹿？」

心ここにあらずみたいなうわの空のような口振りで、母親がドアに向かって呟くように言った。

「あ、あの」

「はい？」

入り口付近に居た幼稚園の先生らしき女性に『古林カリン』という名前の子供の名前を訊く事にした。

名前を出すと、女性は当然の如き口振りで、

「カリンちゃんに何か用ですか？」

怪しんでいるだろうか？とりあえず、事情を話す。

「古林さんが用事になるので、その代理の伏見です」

淡々としすぎる咲の口振りに、女性は引き攣った笑みを浮かべながら、

「そ、そうでしたか。一番奥の、部屋ですから」

「どうも」

咲はそう短く言うと女性の横を通り過ぎるように歩き出す。

と、

女性が唐突に口を開いて、

「失礼ですけど、ハーフですか？」

失礼な質問？と疑問を感じるが、そう質問させた部分はすぐにわかる。

碧眼は外国人の瞳の色で、日本人には珍しい色である。

咲は短く即答する。

「違います」

顔をすこし頷かせた後、踵を返して奥の教室に歩いていく。

午前9時半の高校の教室では、憂鬱そうに窓の外を眺めている勇の姿がある。

どうして憂鬱なのかというと、後ろが淋しいモノがあるからだ。いつもなら、後ろを振り返れば、面倒そうな碧眼を窓の外に向けている咲の姿があるのだが、今日はない。

窓に微かに自分の顔が映っている。何ともやる気のない顔である。だが、なぜ僕はこうも気分がダウンしているんだ？

自然とため息が漏れる。と、ここで肩を軽く叩かれる。

「何を気落ちしてるんだ？今日は彼女の伏見来てないんだな」

朝倉の冗談半分の言葉が、後ろから聞こえてきた。

とりあえず、泳いでいる横目で朝倉を見ながら、

「彼女だったら良いんだけど……向こうにはその気ないから」

「勇はその事に関してはオクテだからな。もうすぐ修学旅行だから

……夜這いでも掛ければ？」

「それ、犯罪だよ？」

「昔の夜這いは女性が受け入れれば  
(禁止言語18禁)」

勇は朝倉の言葉に呆れて一言。

「咲が居たら、殺されてるかも」

「居ないからこそ話せるってもんだ」

幼稚園教室内には、変に気合入れている父母父兄の中に、制服姿の咲が面倒そうな顔をして立っている。

周りに居るのは若くても20代以上の父親と母親と5歳の園児達。孤立感と場違い感を感じながら、つまらなくも面白くもない授業風景……遊んでいる風景を眺める。

楽しそうに笑いながら折り紙や粘土遊びやお遊戯をしている幼い顔をした子供の姿を、周りで見ている親達は笑顔で眺めている。

古林カリンって名前の女の子はブラウンのかかった黒髪をツインテールしていて、黒い大きな丸い瞳の明るそうな子だった。

何だか、私とは対照的な子だ。

周りの親達は子供に手を振るけれど、私は振らない。ただの代理

だから。

それから、午前中眺めた後、古林カリンの母親が到着して、子供と一緒に帰って行った。

私はそのまま、学校に向かって歩き出す。だが、今日は運が悪かったのだろうか？

幼稚園からすこし離れた十字路で、小さな子供が泣いている。

多分、歳は5歳くらいで、髪の色は灰色の肩まで伸びている長髪。瞳の色は咲と同じ綺麗な碧眼の女の子だった。

白い半そでに赤のズボン。涙を一杯浮かべながら泣いているので、無視出来なかった。

咲は女の子の前に屈んで、とりあえず涙を代わりに拭ってあげた。会話がない……ただ碧眼と碧眼で見つめているだけだ。

(どこの子供なんだろう?)

最初にそう思った。横隔膜が痙攣すると、シャックリが出る。今の女の子の状態だ。

咲は立ち上がると、泣いている女の子に向かって、何も言わずに片手を差し伸べる。勇だったら、こんな時に相応しい言葉を言うと思うけど、私には浮かんでこないから、何も言わない。

碧眼の女の子も無言で咲の手を握る。

同じ眼なので、性格も似ているんだろう。私は交番を考えたが、面倒な手続きなどがありそうなので、最後の手段にする事にした。

咲は口をすこしだけ開いて、

「家はどこ？」

短く訊くと、女の子は首を左右に振って答える。

困った。非常に困った。交番行くのは断定で『嫌だ』判定だから……本当にどうしよう。

悩んで、考えた末に、

「歩いて、親捜す？」

短くまた訊くと、今度は首を頷かせた。

女の子からの賛成をもらったため、とりあえずここら周辺の道を

歩く事にした。

学校に向かう反対側の道から、近所の周辺まで歩いたが、この子供の親が見つからない。

咲はもう交番に行くしかないと考え、手早く交番に連れて行く。

交番にはすでに先着が居たようで、

「ユズ！」

母親らしき女性が大きな声を張り上げて、子供を抱きに走ってきた。

微笑ましい光景であるのだったが、今の私にはどうでもよかった。学校に行かないと。

母親らしき女性は顔を上げたが、もうそこには咲は居なかった。もの凄い勢いで走り去っていった。

呆然とした女性は一言だけ、

「逃げたの？」

短く言った。

## 11話 幼稚園最終（後書き）

未完ぽいけど、予定より数話多かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5648a/>

---

碧い炎

2010年10月8日15時59分発行